

(様式第Ⅰ号)

令和6年度 第Ⅰ回総合教育会議 会議録

日 時	令和6年7月11日(木) 14:00～14:45
場 所	市役所本庁舎 北館4階 教育委員会室
出 席 者	高島市長 野村教育長 河盛教育委員 森川教育委員 三宅教育委員 (欠席) 極楽地教育委員
司 会	柏原企画部長
事 務 局	柏原企画部長、萩原教育部長、山本学校教育担当部長、伊藤市長公室長、 田中政策推進課長、長岡管理課長、尾上学校教育課長、浅田学校支援課長、 濱田保健安全・特別支援教育課長、上原青少年愛護センター所長、 下條管理課長補佐、内野政策推進課係長、正好政策推進課員
会議の公開	■ 公 開
傍 聴 者 数	2人

Ⅰ 会議次第

- (1) 開会
- (2) 議題Ⅰ Ashiya PEACEプロジェクトの取組状況について
- (3) その他

Ⅱ 提出資料

- (1) 資料 Ashiya PEACEプロジェクトの取組状況について
- (2) 別添資料

Ⅲ 審議経過

(柏原企画部長)

ただいまより、令和6年度第Ⅰ回総合教育会議を開会いたします。
はじめに、市長より開会のご挨拶をお願いします。

(高島市長)

こんにちは。市長の高島です。本日はご多忙の中、令和6年度第Ⅰ回総合教育会議にご参加いただきまして、ありがとうございます。

今回が今年度第Ⅰ回目です。市長部局と教育委員会が一体となって、「教育のまち芦屋」を推進するための、本当に重要な会議だと思いますので、よろしくお願いいたします。

昨年度は教育大綱を改めて策定し、「自分と地球の未来を、探究と創造を通じて切り拓く市民」というものを「目指す市民像」として掲げました。そして、それを達成するために、『「ちようどの学び」とそれを支える環境づくり」というものを「目指す教育像」に掲げています。

福岡前教育長、そして野村教育長、そして延べ5人の教育委員の方々をはじめとする教育委員会の皆様のご尽力もあり、最高の学びができる芦屋に向け、順調に歩み進めていると思っています。

特に新年度に入り、新たな取組も始まっています。P E A C E サポーターの全校への配置、高い専門性を持った主任指導員ののびのび学級への配置、そして学校の先生方の働き方改革、「ONE STEP p e r s」など、「ちょうどの学び」の実現に向けた取組等も進んでいます。

前回まで冒頭の挨拶では、これまで行ってきたことを話題に出すことが多かったのですが、本日は話題の提供も兼ねて、新しい話をしたいと思います。何かというとA Iの話です。といってもお話ししたいのは、学校教育の現場にA Iを使っていこうとか、子どもたちがA Iをもっと使った方がいいといった話ではありません。これから子どもたちが大きくなり、学校を卒業した後の社会は、A Iが当たり前になっていると思いますが、私たちはそれを念頭に置いた上で、今の教育を考えていかなければならないのではないかと思います。

学校教育について考えるとき、私たちはあくまで学習者である子どもたち中心の学校づくりを進めることを大事にしています。教育というものは、目指す社会への手段となるためのものではなく、子どもたち一人ひとりの可能性を拓くためにあり、その結果、子どもたちが社会を創り、未来の社会を切り拓いていくものだと考えているからです。

先日、A Iを研究している方々とお話をする機会があったのですが、その方々に「今人間がデジタル上でやっている仕事を、完全にA Iができるようになるのはどれくらい先ですか」とお聞きしたところ、「2030年頃ぐらいかな」というお答えでした。内輪の話ですので、どこまで正確かは分かりませんが、研究者たちは少なくとも5、6年後に起こり得る未来として考えているということを確認しました。

では、徐々にデジタルに置き換わって行く世の中で、子どもたちの可能性を拓くために、どういう教育が必要なのか。これは真剣に考えなければいけない問題です。世の中に答えがあるわけではないですので、まさにこの総合教育会議の場も含め、いろんな方々と意見交換や対話をしながら、芦屋の子どもたちにとっての最もよい教育環境、最もよい学びを考えていくことができればと思っています。

そのためにも、総合教育会議は本当に大事な会議体だと思いますので、一緒になって、「教育のまち芦屋」の実現に向けて、歩みを進めていければと思います。今後とも引き続きよろしく願いいたします。ありがとうございます。

(柏原企画部長)

ありがとうございました。

それでは本日の議題、「A s h i y a P E A C E プロジェクトの取組状況について」、所管課より説明をお願いいたします。

(尾上学校教育課長)

学校教育課の尾上です。よろしくお願いします。

A s h i y a P E A C E プロジェクトの取組状況について、説明いたします。資料の「I はじめに」と別添資料Iをご覧ください。

令和5年8月に学校教育改革推進室が立ち上がり、第3期芦屋市教育振興基本計画に掲げている「夢と志をもって自らの未来を切り拓く子どもの姿」を目指し、A s h i y a P E A C E プロジェクトを進めております。本プロジェクトは指導主事が、全国学力・学習状況調査の分析に加え、学校現場における課題を見つめ直し、今、子どもたちに何が必要かを練

り合い考えたプロジェクトです。子どもたちが何より安心して学ぶことをベースに、「自ら進んでチャレンジしていく環境を共に作り出ししていく」ことを目的としております。

次に、「2 Ashiya PEACEプロジェクトの概要」をご説明します。このプロジェクトは、5つのコンセプトから成り立っています。1つ目は、「どの子どもにとっても安心できる居場所を共に考えていく」こと。2つ目は「学びの主体を子どもたちとして、身の回りの社会や自然に対する疑問や、自ら立てた課題を自ら追究していく過程を大事に、探究的な学びへの転換を図る」こと。3つ目は、「誰一人取り残すことがないように、個々の特性に応じ、個別最適な支援を行っていく」こと。4つ目は、「一人では越えられない課題に対して、仲間や教師の力を借りながら、つながりながら学ぶ」こと。5つ目は、「子どもたちが夢中になって遊び、学ぶ、失敗や成功を繰り返す体験・経験を大切にする」ことです。これら5つのキーワードの英単語の頭文字を取り、P・E・A・C・Eとしました。

自らやってみよう、挑戦しようという意欲の源は、人から認められる、自分のありのままを分かってもらえる安心感であると考え、あらゆる教育活動、環境づくりのベースに据えたいと考えております。

次に、「3 具体的な取組と現状」について、説明いたします。別添資料2をご覧ください。

別添資料2は、教育委員会がAshiya PEACEプロジェクトとして行っている事業について示したものです。これを基に、令和5年度8月以降、学園長会や学校訪問の際に対話を繰り返しながら、芦屋の教育がこれまで積み上げたことに加え、これから目指していきたい方向性と、各学校の実態に合わせて、それぞれの学校が令和6年度に向けてプロジェクトを計画し、現在実施しているところです。

PEACEサポーターについては、不登校児童生徒の個々の状況を踏まえ、学習や生活に関する支援や、校内サポートルームの環境整備や欠席者への支援を行うために、小学校2校につき1名、計4名と中学校3校に各1名、計3名の合計7名を4月より各学校に派遣しています。定期的に担当指導主事、のびのび学級の主任指導員が学校へ訪問しながら、PEACEサポーターとの面談や実情把握を行っており、今後PEACEサポーターに対して研修も行っていく予定です。

学校内でもPEACEサポーターが認知され、ある小学校ではPEACEサポーターが来る日に合わせて、児童が毎日登校するようになったという事例も聞いております。

続いて、現在28名の教員で構成している、探究的な学び研究推進チーム「ONE STEPpers」ですが、子どもたちが学びの主体となる「委ねる学習」を創造するため、研究を進めています。既にこれまで4回の会議を実施し、コンセプトの共有や、各自取り組んでいる実践の交流などを行っています。先日は、先進校視察として計14名の教員や指導主事が先進校へ訪問し、その内容について「ONE STEPpers」にも共有しています。今後は芦屋の取組を発信するため、公開授業を行っていく予定です。

最後に「Ashiya Education Day」についてご説明します。

昨年度も1月13日に、教育アドバイザーの苫野先生をお招きしてトークセッションなどを開催し、地域の方々や保護者、学生、学校関係者が互いに学び合ったり、地域全体で教育の質を向上させるために建設的に議論を行ったりしながら、芦屋の教育について考え、理解を深めました。

本年度は、夏・秋・冬と年間3回計画しております。先ほど話した「ONE STEPpers」の公開授業についても、秋のEducation Dayの一環として10月25日に行う予定です。

続いて「4 専門アドバイザーの委嘱について」です。別添資料3をご覧ください。

Ashiya PEACEプロジェクトを推進するにあたり、プロジェクトの全体は教育

アドバイザーの苫野先生より、またONE STEP p e r sの専任講師として社団法人ScTNの山口先生や、その他にもそれぞれの分野の専門家の方々より助言を受けながら取り組んでいます。

新年度になり3か月が経過しました。各学校園と教育委員会が同じコンセプトで、それぞれのPEACEプロジェクトを進めているところです。現状をそのまま維持するのではなく、学校園や教育委員会の中で対話を通じて、トライアンドラーンを大事にし、常にこのプロジェクトをアップデートしながら進めてまいりたいと思います。

説明は以上です。よろしくお願いします。

(柏原企画部長)

説明は終わりました。ただいまの議題につきまして、自由闊達にご議論をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

(高島市長)

本当にこの1年いろんな形でいろいろと取り組んでいただいたと思います。PEACEサポーターのおかげで、学校に来られるようになったという話や、ONE STEP p e r sが28人も集まってくださったことなど、とても嬉しく思います。これまで「研究指定校に指定するので研究してくださいね」と、半ば「やらされていた研究」だったものが、先生方が自ら探究しようと手を挙げてくださり、それが28人も集まったというのは本当に素晴らしいと思っています。教育長、その辺りについて想いといったものはありますか。

(野村教育長)

トップダウンで指定校に選ばれて取り組みんだとしても、ある程度リーダーシップは発揮しなければいけない部分はあると思いますが、与えられたものには違いありません。しかし、主体的な子どもを育てるとなった時、大人側が受け身であってはいけません。大人側の主体性、特に教師の学びや姿勢は、子どもの学びと相似形だと思っています。そういう意味では、教師たちにも火がついたというのは、大きなことだと思っています。教師としても、「力をつけたい」とか、「ここを伸ばしたい」とか、あるいは「困り感のある子どもたちを理解できるような教師になりたい」とか、そういったモチベーションはあると思います。今回、それらを探究のテーマにして、正解がないところへ飛び込んで行くわけです。教師もTry & Learn (トライアンドラーン) !で、失敗するかどうかよりやってみて学んで、大人自身も生徒と一緒に、学んでいこうという方向へ舵を切り直したのです。これからはトップダウンではなく、今までやってきたことをボトムアップで改善していくというスタイルになって行くのではと期待しています。ONE STEP p e r sは当初の事前調査の段階では15人ほどの人数だったのですが、そこからほぼ倍の数になっています。ちょっとずつ、いわばベビーステップで取り組んで、それぞれがこれまでやってきたことを少しずつアップデートしていき、子どもに訊きながら、委ねながら取り組んでいこうとしています。人数が増えているのも、そういった取組に少しずつ周りの教師たちも刺激されている証だと思うのです。気がついたら教師全員が、ONE STEP p e r sになっている可能性もあります。

(高島市長)

それはいいですね。

(野村教育長)

何年越しになるかは分かりませんが、そうなれば一番いいですね。

(高島市長)

教育委員の皆さんは、その辺りの変化を感じたりはしますか。

(河盛委員)

先週の土曜日、たまたまNHKのプロジェクトXという番組を見ていたところ、黒柳徹子さんがトモエ学園と小林先生のことをお話されていました。小林先生は、一番戦争が激しいとき、普通の学校では扱いきれない問題のある生徒や、障がいのあるお子さんをみんな引き受けて、「全ての子どもには可能性がある。だから子どもを信じて、自主性に任せる」という方針で運営されていたそうです。なんだか芦屋市でやろうとしていることと、よく似ているなと思って見ていました。残念ながら戦争が悪化し、学園の存続はできなくなりましたが、黒柳徹子さんは、「私はこの学校でなかったら、自分の行動は全部否定されて、今の私はなかっただろう。」とおっしゃっていました。教育というものは、なかなか結果はみえません。確かに、不登校の数が減るとか、いじめが減るとかそういうことであれば、ある程度の評価はできると思いますが、今やっていることが果たして10年、20年先に花開いているかどうかはその時にしないと分かりません。ですので、今やっていることが本当に正しいのかと言われると、はっきりそうですとは言にくいことは確かです。だからこそ、今やっていることが本当に、その方向性でいいのかということは、小まめに検討していく必要があると思います。

(高島市長)

本質的に一番大事なところは、いつの時代でも変わらないということですね。

(三宅委員)

やはり先生方もONE STEP p e r s で学びながら一緒に作っていくことが大事ですね。先生方がわくわくしている姿を子どもたちが見るというのも大切なことだと思います。

私も小学校のとき、先生が「まりちゃんのいいところはここだよ」と言ってもらったことで前に進めたことがあります。そういうものはどんな時代でも変わりません。子どもたちにとって、自分の良いところを知ってくれていたり、悪いところも含めて見守ってくれているというのはとても安心できることです。勉強を教えることも大事ですが、先生にはそういう役割で一番いてほしいですし、それが先生のいる意味であるとも思います。先生たちがこういった活動にわくわくしながら取り組んでいる姿を見て、それが子どもたちにも広がって、みんなで一緒に取り組んでいけるような、気持ちの部分かもしれませんが、そういったことを大切にしてください。

(高島市長)

子どもたちはONE STEP p e r s のことを知っているのですか。

(尾上学校教育課長)

どの先生がONE STEP p e r s の先生かというのは分からないかもしれませんが、学校によっては、既に授業の中でいろんな方が来られていますので、「なんだか少し授業が変わってきているな」という変化は感じ取っているのではないかと思います。子どもたちを通じて、保護者の方々にも徐々にですけど、広がっているように感じています。

(高島市長)

先生方も、ワクワク楽しく取り組んでいるというのは大事ですね。

(野村教育長)

気をつけているのが、「成果より成長」ということです。成果主義に走ってしまうと、すぐに数値目標に走ってしまいます。人の成長は本当に時間のかかるものですので、子どもたちが自ら学んでいけるように、どれだけ寄り添い、彼らと一緒に探究できるかが大事だと思っています。私たち教育委員会では「観の転換」をキーワードとして、校長会や担当者会、それこそONE STEP persの会などで、エッセンスを落としこんでいくようにしているのですが、これまでの教育観だとか、学校観だとか、あるいは授業はこうあるべきという考え方を、1回崩してみても、これから必要な学びとは何か、学校とはそもそも何をするとするか、といった本質を問い直していくことがすごく大事だと思っています。少なくとも、これまでの「t e a c h」から「c o a c h」に変わってきていますし、「教えることから学ぶ」ということも最近ではよく言われています。教師やONE STEP persだけがアップデートされていてもだめで、保護者の方々や取り巻く大人たちも一緒にアップデートしていないといけません。Education Dayなどのイベントや、ホームページ等での発信を通じて、あるいは実際に子どもの様子を見てもらうのが一番いいですので、参観日などで子どもを見に来ていただいた際、授業の良し悪しではなく子どもたちの姿を見て感じ取っていただきたいと思っています。

(高島市長)

「観が転換しますよ」と教えるのではなく、現場を見てもらいながら感じてもらうということですね。

(野村教育長)

そうですね。全国的にもあちこちで同じような動きがあるようです。アドバイザーの先生から各事例のお話を聞いていても、それぞれの取組の方向性がどこか似ています。先ほどのプロジェクトXのお話もそうですが、これまでの一斉型で、効率化を求めていた授業から少し転換が図られていると感じています。アドバイザーの先生方からの言葉も支えとなりながら、今、舵を切っているところです。

(三宅教育委員)

やはり、保護者の方々のご理解が一番大事ですね。保護者の方々はいいい高校、いい大学に行かせたいという方針なのではないでしょうか。Education Dayなどの取組の中で、たくさんの保護者の方々に、子どもたちの生き生きしている姿や、自分で考えて発言したり、ほかの子どもたちと相談し合って何かをやっている姿を見てもらうのが大事ですね。

それからこの間、大阪で鈴木寛先生がおっしゃっていたデータで、子どもたちが自分の親に対してどう思っているかのデータがありました。

(野村教育長)

OECDから出ているデータですね。

(三宅教育委員)

家族からのサポートを感じているかというような調査をしたものなのですが、日本の子どもが世界最低だったんですね。日本の子どもはいろいろ守られたり、与えてもらったりされてイメージだったので、結果を見たときには驚きました。

（野村教育長）

親ではなく、仲間や先生に頼るところが大きいという結果だと思います。

（三宅教育委員）

あの結果を見るとそうですね。だからこそ、先ほども申し上げた通り、保護者も一緒になって何か取り組んでいかないとはいけませんね。

（野村教育長）

おっしゃる通りですね。今度のE d u c a t i o n Dayでは、「そもそも学力とは」というところにも焦点をあてたいと思っています。先ほど市長がA Iの話をしていましたが、今はあるものは使っていい時代で、電卓も使っていいのが前提ですから、知識もそこまでつめこまなくてもいい時代が変わってきています。そんな中では、深く思考することがより大事になってきます。教師たちの中でも、学力とは点数主義であったものが、今後は少し変わってくるのではないかと考えています。学識の方からも、人間には認知能力と非認知能力があるため、見える学力と見えない学力があるとお聞きしました。就学前から行う教育の大事さや、人生の成功とはこういったことかなど、そういったお話を今度のE d u c a t i o n Dayでディスカッションしたいと考えています。

（高島市長）

8月のE d u c a t i o n Dayですか。

（野村教育長）

そうですね。10月でもそのような話をする方向性になるとイメージしています。

（高島市長）

保護者の方に「いい高校に行っていい大学に行けば、いい人生が待っているというわけではありませんよ」と言っても、すぐに「そうですね、分かりました」となるはずがありませんし、「観の転換」は簡単なことではないですね。

（野村教育長）

そうですね。

（高島市長）

ただ、転換ができなくてもその方のもともとの考え方が間違っているわけではありませんよね。間違っているから変えたほうがいい、という訳ではない。やはり、保護者の方に子どもたちの姿を見てもらうのが一番ですかね。

（野村教育長）

そうですね。また、「これってどうなんだろう」「これがどんなふうにつながっていくんだろう」といった対話が必要ではないかと思えますね。

(河盛委員)

例えば勉強を一生懸命することが否定されるわけでもないし、野球を一生懸命して大谷選手を目指すということも間違っているわけではないですもんね。

(高島市長・野村教育長)

間違っていないですね。

(河盛委員)

私の娘は私立の女子中高に行っていたのですが、そこではいろいろな取組をやっていました。いろいろな社会貢献もやっていましたし、いろいろな経験もできるのですが、そういう活動には一切参加せず、塾ばかり行っている子もいました。ただ、塾ばかり行っている子は、卒業後は学校から離れしもうところがあると思います。逆にいろいろな取組に参加した子は、愛校心のようなものが存在するのではないかと思います。これはあくまで私立学校の話ですが、公立学校でも同じだと思います。違う方向に行きたい人を否定はできませんが、やはり魅力的なプログラムを用意することは非常に大事ではないかと思います。それを選ぶ・選ばない人がそれぞれいるのは、仕様がなくていいですね。

(高島市長)

まさに環境づくりの話ですね。無理強いはできませんが、いかに魅力的な学びの環境があるか、自ら意欲的に学べる環境があるかというのが大事ですね。

(森川委員)

いい高校、いい大学というお話がありましたが、探究的な学びを進めていくことでいい高校、いい大学に入れないというものでもないですよ。基礎的な学力はおろそかにせず、探究的な学びにも力を入れていくものと思っていますが、芦屋市が進めようとしているのもそういうものという認識でよろしいですか。

(野村教育長)

学び方が多様になってくることで、大人になる過程の中で、自分で選択したり、自分に問いかけたりすることも増えます。そういう経験をもとに、大学や会社もそれぞれ選択をしていくと思うのですが、「選択」と「決定」の連続性の中で、誰かに褒められることを通じて選択できるようになっていくのではないかと思います。最近よく聞く言葉に「自由進度学習」というものがありますが、芦屋市は自由進度学習ではなく「自由進度“的”な学習」と言っています。

(高島市長)

何が違うのでしょうか。

(野村教育長)

いわゆる自由進度学習と言ってしまうと、教師の習性として、型にはめようとしてしまうことがあります。マニュアル的に「自由進度学習とはこの本に書いてあることをすればいい」と言ってしまうと、子どもたちのことを見なくなってしまいます。どの子に自由進度“的”学習を取り入れるかということは、すごく大事なことです。10人取り入れている教室があ

れば、全員のところもあるかもしれない。他地区では、学校全体に取り入れている学校もあります。一斉授業はよくないという意見もあるのですが、私は一斉授業を全く否定していません。学び方はグラデーションというか、一斉授業をするときもあれば、基礎を押さえるときもあるし、自分で復習したい時には一人になって学ぶときもあれば、賢い友達に聞いてみようというときもある。人に頼るのも、学び方の一つです。だから全員でやりなさいとか、誰々ができるまで休み時間に行っちゃだめだとかそういうのではなく、森川委員がおっしゃるように、自分で「選択」と「決定」を繰り返していけば、きっと進路も自分で決めていけるはずです。

（高島市長）

基礎学力の話ですと、本当にちゃんと探究しようと思えば、下支えがないとできないと思うんですね。基礎的な学力がない中で探究をしようと思っても難しい。探究というものは別に世の中の課題解決だけじゃないですが、例えばそれをやろうとすれば、先人たちの手法を学んだうえで、解決策を考えることが必要だと思います。順番としては「探究しようと思えば、基礎学力は必要だ」という考え方になるのがいいのではないかと思います。

今私が一番課題に思っているのは、結局、目の前の授業をなぜ受けないといけないのか、子どもたちがあまりよく分かっていないということです。テストに出るからという説明では子どもたちは納得しません。やはり目の前の、自分が本当に面白いと思っていることをやっているときに、「それって算数がなきゃ解決できないんだ」とか、そういった順番で、結果的に基礎的な学力が必要だと実感することに意義があるのではないかと思います。私自身は基礎的な学力から入ってしまいましたが、それよりも自分がやっていることが学びとこういうふうに繋がっているのだと思えていたら、もっと楽しかったらいいなと思います。

（野村教育長）

応用から入り基礎に戻る、つまり、あえて正解が分からないところへ行くことで、それを知るためには基礎を知らないといけないんだ、と気付くことができることはありますね。かつての学力調査でA問題・B問題というものがありました。A問題が基本問題、B問題が応用問題となっているのですが、B問題的な授業をしていたほうが、結果として学力は伸びるという調査結果もありました。分からないことを追究する過程で、結果として学力が身につくということです。

（高島市長）

それでも、A問題をおろそかにするということではないということですね。

（野村教育長）

そうですね。基礎から積み上げるばかりが学力ではありませんし、先ほどの学力とは何かという話とも繋がりますが、分からないところから入ったその過程の中で、粘り強さや、挑戦すること、失敗してもくじけないことなどを学ぶことができます。基礎から入るだけでは、くじけてしまうケースも出てきてしまうと思います。

（三宅教育委員）

そうですね。

（高島市長）

面白いですね。

(野村教育長)

「それって何？」という疑問からも探究が始まることがあります。基礎があまりできていない子が、「分数の割り算って何でひっくり返すの？」とぼろっと言ったところから、深まっていって授業もあつたりします。そういう過程がすごく大事だと思っています。教師たちも、教えるのではなく、「子どもから問わせよう」という授業スタイルにしていけないといけません。

(高島市長)

「問わせよう、子どもから」ですか。

(野村教育長)

はい、今後より具体的な話もしていきたいですね。

(柏原企画部長)

議論が尽きないようですが、時間にもなってまいりました。市長もいろいろなお話をお聞きになりましたが、今後の抱負や、期待することなどございましたらお願いします。

(高島市長)

本日、いろいろなお話がありましたが、教育長がおっしゃっていた「先生の学びと子どもの学びは相似的だ」という話に尽きるという気がしています。教育改革というと、どうしてもトップダウンになりがちですが、学校現場でやりたいことはそれぞれ違います。その中で、16校園それぞれでP E A C Eプロジェクトを計画したというところが、大変喜ばしいと思います。河盛委員もおっしゃったように、成果はすぐに目に見えないところが大きいでしょうし、それぞれの学校がそれぞれでやっているからこそ、全体として目立ちにくい部分あると思いますが、最終的には大きな果実になるのではないかと思います。先生も探究し、教育委員会も探究し、市長部局も探究し、もちろん市民の皆さんも探究して、一緒になって、教育のまち芦屋を創っていききたいと改めて思いました。今後ともどうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

(柏原企画部長)

ありがとうございました。本日予定されていた議題は以上となります。

次第項番3の「その他」でございしますが、事務局から特にご報告はございません。それでは、最後に教育長からご挨拶をお願いいたします。

(野村教育長)

本日はどうもありがとうございました。今、言葉が出てきたところで言いますと、子どもたちが安心して失敗できる、先生も安心して失敗できる環境を一番ベースにしていきたいと思います。その安心感をベースにどんどんチャレンジしていくことで、初めて粘り強さというものが出てくると思っています。これから、A Iの時代が加速していきますが、その中でも「学力とは何か」と教師以外の保護者の方々や地域の方々とも一緒に対話をしながら、学校あるいは地域の子どもたちに必要な力とは何かを、問い合って探究していきたいと思います。その積み重ねが教育大綱で示す「ちょうどの学び」ですとか、教育振興基本計画で言え

ば、「未来を切り拓く」といったところに繋がっていくのではないかと考えています。本日は改めて、「安心」「対話」文化の大切さ、そして問い合いながらつむぎ合っていくという「学び方」の大事さを確認させていただきました。

引き続き教育委員会も、それから学校現場も、子どもたちも、地域も一緒になって、探究してまいりたいと思います。本日はありがとうございました。

(柏原企画部長)

ありがとうございました。

本日の会議録でございますが、作成次第、その内容を各委員にご確認いただきますので、引き続きよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、本日の会議を閉会といたします。ありがとうございました。